

## 5 世紀における西北インドのフーナ族

### The Indo-Hūṇas of the North-West India in the 5th century

小谷 仲男

Nakao Odani

2006 年にドイツの若手研究者 G. メルツァー (Gudrun Melzer) がノールウエイの実業家スコイエン (Schøyen) 氏が収集する一枚の銅板銘文 (Copper scroll inscription) の解説に取り組み、その成果を次の論文名で発表した。

G. Melzer, A copper scroll inscription from the time of the Alchon Huns (in collaboration with Lore Sander), in: J. Braavig ed. *Buddhist Manuscripts in the Schøyen Collection*. vol. III, Oslo 2006: 251-278.

スコイエン氏はこの銅板碑文を 1996 年に入手したという。その出土状況はもとより、その出土場所すら不明である。銅板は薄い板状のもので、入手当初は巻物の状態になっていた。開いた大きさは縦 58cm、横 26cm (復元値) である。碑文は縦長にした銅板の片面 (表) に、横書きにして上から下へ 54 行に書かれる。ブラーフミー文字、言語はサンスクリットである。メルツァーは碑文の解説に際し、ブラーフミー写本学のベテラン先輩である L. ザンダー (Sander) 博士の協力を仰いだ。二人の文字に対する書体鑑定はギルギット・バーミアーン第 1 型 (Gilgit/Bamiyan Type I)、約 6 世紀であり、銅板の保存状態、書写の誤りによる難解さがあるものの、偽物ではなさそうであった (Melzer: p. 263)。全部で 54 行に書かれた碑文の内容は、仏教徒による仏塔建立とその完成にさいして作成された寄進文である。最終的には巻物にして、仏舎利とともに仏塔内部に奉納されたとおもえる (挿図 1 参照)。

碑文の冒頭、第 1-3 行は三宝 (仏、法、僧) に対する帰依を述べ、そのあとの第 30 行まで、碑文の全体の半分以上を費やして一つの仏教経典を引用する。メルツァーはその経典名を *Śrīmatībrāhmaṇīparipṛcchā* (バラモン女性シュリーマティーの問い) と復元する。ただ、サンスクリット・テキストは現存せず、そのチベット訳 1 種、漢訳 2 種が存在する。漢訳は竺法護訳『梵志女首意経』1 卷 (大正蔵、卷 14: 939b-940c) と菩提流志訳『有徳女所問大乘経』 (大正蔵、卷 14: 940c-942a) とである。経典の検討は仏教史のうえ、特にガンダーラ仏教の展開を考えるうえで貴重であるが、それについてはメルツァーの詳しい研究を参照いただくとして (Melzer: 253-256)、ここでは引用経典に登場する主役が女性信者シュリーマティー (首意) であったことだけを留意していただきたい。次の第 31-32 行は短文の偈頌を引用する。メルツァーによるとこの偈頌は龍樹 (ナーガールジュナ) の『中論』

冒頭の帰敬偈と同じである。これの漢訳は鳩摩羅什訳『中論』巻1（大正蔵 30: 1b14-17）や同『大智度論』巻5（大正蔵 卷 25: 97b12-14）における引用にも見られる (Melzer: 273, n.168; n.171)。

次の第33行から第40行にかけては、このたびの仏塔建立の日付とその建立に深くかかわった人物、つまり発起人や施主たち、加えてその善行から得られる功德の配分にあずかる施主たちの縁者、友人たち、さらに間接的な協力者の国王、地域の領主たちの名前が列記される。全部で13人。中には銅板の欠損のために称号のみで知られる人物2人が含まれる。歴史的関心からするとこの寄進者一覧はこの銅板碑文のうちで最も貴重な部分であろう。まずその部分の翻訳を下に示そう。便宜上、列挙された人物を人数分の No.1-13 に分け、行数はそれぞれの文中に記す。その後少し解説をつけ加えることにしたい。

（第33行）紀年68、カールティッカ (*kārttika*) 月の白分7日（秋10-11月）、この日に如来（ブッダ）の遺骨を安置した仏塔（チャイティヤ *caitya*）が建立された。

1. （第34行）大僧院の管理者 (*mahāvihārasvāmin*) にしてオパンダ (*opanda*) の息子のターラガーンのデーヴァプトラ（天子）・シャーヒ（王） (*tālagānika-devaputra-ṣāhi*) の……（名前8字欠損）
2. （第35行）その父のオパンダとともに (*sārdham*)
3. その妻であり、サーラダ国王の娘 (*sāradaṣāhiduhitrā*) の（その名） *buddh*…（6字欠）とともに
4. （第36行）大僧院の女性管理者アルチャヴァーマナー (*arccavāmanā*) とともに
5. その父の *ho..gaya* とともに
6. その母の王妃 (*mahādevī*) ……（その名3字欠）とともに
7. （第37行）その善智識 (*kalyāṇamitra*) であり、軌範師 (*ācārya* 阿闍梨) であるラトナーガマ (*ratnāgama*) とともに
8. 大王 (*mahāṣāhi*) ヒーンギーラ (*khīṅgīla*) とともに
9. （第38行）天王 (*devarāja*) トラマーナ (*toramāna*) とともに
10. 大僧院の女性管理者サーサー (*sāsā*) とともに
11. 大王 (*mahāṣāhi*) メハマ (*mehama*) とともに
12. （第39行）サーダヴィーカ (*sādavīkha*) とともに
13. サードヴィーカの息子である大王 (*mahārāja*) ジャヴウーカ (*javūkha*) とともに  
メハマ王の治世において (*mehamarājye vartamāne*)

この仏塔建立の寄進者一覧に先だって（第33行）日付が記される。紀年68と記されるが、紀元名がないため、その元年が不明で、簡単には西暦に換算できない。メルツァーは銘文に書かれた内容を考慮してラウキカ紀元 (*laukika-saṃvatsara*) を採用し、A.D. 492/93 とした (Melzer: 263-4)。ラウキカ紀元は天文学的知識に基づいて作成された一つの暦法であり、実際には紀年に25年を加え、さらに省略された百年単位の数字を適宜加算して西暦

年数に換算することができる。この場合は  $68 + 25 + 400 = 492/93$  である。R. サロモン教授によるとラウキカ紀元はカシュミール地方などでよく使用されたという (Salomon 1998: 196)。A.D. 492/3 という年代は碑文書体の年代などと照らして妥当であるとおもわれる。その年の秋に仏塔 (チャイティヤ) が完成し、それを記念する銅板碑文が製作され、仏塔の内部に安置されたのである。仏塔の建立だけでなく、それに関連する寺院の諸施設、たとえば僧侶の学問、修行する講堂、起臥生活する僧房や食堂、仏像を安置する金堂、倉庫も同時に準備されたとおもえる。仏塔の寄進者はその後の仏教寺院の運営管理にまで責任を持つことが期待されたからである。

次の第 34 行以降は仏塔建立に貢献した人物が列挙される。その最重要の人物が筆頭に挙げられる。それが (1) 大僧院 (Mahāvihāra) の管理者であり、デーヴァプトラ (天子)・シャーヒ (王) という称号を持つターラガン国王である。残念ながら王名が銅板右端の欠損部分にあたり失われてしまった。メルツァーは地名のターラガン (Tālagāna) に注目して、それがアフガニスタン東北部にあるターラカーン (Tālaqān) であると考えた (Melzer: 256, 264)。クンドゥズ (Qunduz) の東方約 60km の町である。私自身もバダフシャンへ調査に向かう途中何度か通過したことがある。岩塩の産出地が近くにあり、ターラカーン川は塩分を含んでいて魚の姿はなかった。メルツァーはそこに仏塔が建立されたとした。

(2) 国王の父オパンダであり、連名寄進者の先頭に挙げられる。連名の寄進者とは文頭に Sārdham (ともに、jointly, together with) の語を付けて列挙されるものであり、今回の銅板碑文では 12 人とも同様であり、「筆頭の施主 (国王) とともに、あるいは施主と並んで仏塔建立に協力した人物」という意味で記される。こうした連名寄進者の中には故人が含まれることがある。それは現世で生者が行う仏塔建立などの善行が功德 (merit) となり、その一部が故人にも配分され、死後の世界でそれを享受し、より安楽に過ごし得るという廻向 (pariṇāmanā, transfer of merit) あるいは死者の供養の概念である。この思想は仏教徒、ジャイナ教徒、ヒンドゥー教徒にも共通してみられる。国王の父オパンダはあるいは故人であったかもしれない。

(3) ターラガン国王の妻である。名前が Buddh… と前半のみが残る。出身はサーラダ国の王女である。その父サーラダ王の名は記されない。メルツァーはサーラダという地名について、カシュミールにあるシャーラダ (Śārada) を思い浮かべた。それは同名の女神の名に由来する聖地であり、川の名でもある。しかしアフガニスタンのターラカーンからあまりにも遠く離れており、ここではあまり意味を持たないとした (Melzer: 257, n.37)。

(4~6) この 3 人は大僧院の女性管理者の娘とその両親である。順序からすると上のサーラダ国の王女と血縁関係のある人物のようにおもえ、あるいは姉妹とその両親かもしれないと私は考える。

(7) ここでラトナーガマ (Ratnāgama) という一人の仏教僧 (名前からみてインド出身か) が登場する。上述の寄進者たちにとって、仏教のよき教師であり、今回の仏塔の建立を勧め、工事や技法についても助言、指導した人物であろう。

(8-9) ヒーンギーラ (Khīngīla) とトラマーナ (Toramāna) という二人の国王を列挙する。

(10) 大僧院の女性管理者サーサー (Sāsā) である。ここにいう大僧院と上に述べられた大僧院と同じか、別のものか不明。またこの女性が (3)、(4) の女性たちとどのような関係があるのか。

(11~13) ここでメハマ (Mehama) とジャヴウーカ (Javūkha) という二人の国王が追加して列挙される。二王の中間に記される (12) のサーダヴィーカ Sādavīkha はその下のジャヴウーカ王の父と記されるが、メハマ王との関係は不明。

13 人の寄進者を列挙したあとに、「メハマ王の治世中のことである (during the reign of Mehama)」と、文頭の仏塔建立とその日付に呼応させて寄進者一覧の文章を結ぶ。メルツァーはその記述から「仏塔はメハマ王の統治領内に建立されたこと、また 4 人の国王は誰一人として故人であると記されていないので、日付の A.D. 492/3 には 4 人はそれぞれの地域を同時に統治していた」と考えた (Melzer: 262, Mehama)。4 人の国王の称号にはイラン系とインド系の用語がもちいられており、イラン系の称号 (*śāhi*) の王は北より、インド系の称号 (*rāja*) の王は南よりの地域を支配し、また称号には王の地位の上下があったのではないかと考えた (Melzer: 258: Titles)。そのなかでターラガン王のような *devaputra-śāhi* (天子・王) 称号はクシャン王の伝統的な称号であるので興味ぶかい。

メルツァーのスコイエン・コレクションの銅板碑文の解説とそれから導き出した歴史背景の提言は学界、とりわけインド・フーナ、あるいはアルハン・フン (Alkhan Huns) のコイン学研究者の間に大きな波紋を引き起こした。銅板碑文にはなお第 40 行から 54 行までの文章が残っているが、ここで中断してどのような反論や賛成意見があったのか、その概略を見よう。そのうえで碑文テキストの最後の部分までを読むことにしたい。碑文の最後の部分にも問題を解く重要なヒントが隠されているからである。

最初にメルツァー論文に反応したのはコイン研究者ヴォンドロヴェク Vondrovec (2008), *Numismatic evidence of the Alchon Huns reconsidered. Beiträge zur Ur- und Frühgeschichte Mitteleuropas* 50: 25-56 である。私は厳密な編年研究を目指していたコイン学の現状から見て、メルツァーの提案におおいに反駁するのかと思ったが、意外にもメルツァーの 4 人の王の同時（共同）統治に合致するように貨幣の編年を調整し、かえってメルツァーの提案をコイン学から裏付ける提案をした。つまり、同一王の発行する貨幣にも、発行の時期によってスタイルが変わる。そのなかから、それぞれの王の互いに類似したスタイルを持つ貨幣を選びだし、4 人の王の共存が可能な時期が存在することを実証しようとした (p.31, Table 2; Plate 40, later stage)。同じくウィーンのコイン学者たちの論文、Aram, M. and Pfisterer, M. (2010), Alkhan and Hephthalite coinage, *Coins, Art and Chronology II*, Wien: 13-38 は、Vondrovec (2008) の論文を積極的に支持し、それが銅板碑文の内容と関連しあうコイン研究上の例証を用意したと評価する (Aram & Pfisterer: 22, n.35)。また、大英博物館の貨幣部門に勤務したアーリントン (E. Errington 2012) もほぼメルツァーの提案を受け入れ、出土貨幣の分布状況からジャヴウーカ (Javūkha) はガンダーラ、トラマナー (Toramāna) はパンジャーブを支配したのではないかと付け加えた (Errington, E. and Curtis,

V. S., *From Persepolis to the Punjab*. The British Museum. paper ed., 2011: 153)。

2012 年になって、中央アジア史のフランス人研究者のヴェシエール (Vaissière) はメルツァーの論に真っ向から反論を唱えた (Etienne de la Vaissière, A note on the Schøyen copper scroll: Bactrian or Indian? *Bulletin of the Asia Institute* 21: 127-130)。かれの主張の最も画期的なところは銅板碑文にある Tālagāna という地名をメルツァーのようにアフガニスタン東北部のターラカーンではなく、パキスタン、パンジャーブ州にあるターラガーン Tālagan(g) であると考えた点にある。メルツァーの提案の一つはヒーンギーラ、メハマ、ジャヴウーカ、トラマーナ (Khīngīla, Mehama, Javūkha, Toramāna) の 4 人のアルハン・フン王が地域を分けて同時に統治し、そのうち少なくともメハマ王の支配の範囲がヒンドゥクシュ山脈の北側にまでひろがっていたとする。しかしそれらの王の発行する貨幣の分布はみなヒンドゥクシュの南側に限られた。もしも銅板碑文のターラガーンの地名がヒンドゥクシュの南側で見つかるのであれば、銅板銘文に関する疑問の大部分が解消する。ブラーフミー文字・サンスクリット、そしてインド紀年を使用した銅板の奉納碑文はヒンドゥクシュ北側では発見された例がなく、むしろヒンドゥクシュ南側の地域で発見される例が多いからである。またヴェシエールは銅板銘文の中で仏塔の建立されたところが Sārada とされているが、その村もパンジャーブ州のターラガーンに近いところに探し出せるはずだとした (挿図 2)。

ヴェシエールの論文の発表後、2013 年には M. フィステラー (Pfisterer) が、2014 年にはヴォンドロヴェクがそれぞれ未公開のアルハン・フン貨幣コレクションの大部なカタログと研究を出版したが、ヴェシエールの提言に十分こたえることができなかった。大部分が出土地不明の貨幣コレクションの整理には、銅板碑文の地名比定の問題はさしあたり、さほど重要性を持たなかったようである。しかしヒンドゥー教の発展史を現地の遺跡調査を通して研究するオランダのバックー博士の受け止め方は少し異なった (H. Bakker, A Buddhist foundation in Śārdīśya: a new interpretation of the Schøyen copper scroll, *Indo-Iranian Journal* 61, 2018: 1-19)。バックー博士はヴェシエールのターラガーン (地名) のパンジャーブ所在説を積極的に支持し、ヴェシエールやメルツァーが十分に追及しなかった仏塔建立の村 Śārdīśya (Śārada) の所在情報を銅板碑文の後半部分から読み取ろうとした。

そこで私たちも、ふたたび碑文のテキストに戻り、メルツァーとバックー博士の解釈を比較しながら、第 40 行から最後の第 54 行までを読んでみよう。第 39 行で寄進者たちの名簿がおわり、つぎに施主による祈願の文章 (韻文) が始まる。

第 40-42 行 多くの仏塔は今日もなお地上を明るく照らす。山のように大きな仏塔は白く輝き、その白さは霜や真珠のネックレス、白いスイレンの花、水晶、ホラ貝のごとし。塔頂には傘蓋がそびえ立ち、塔の周囲は欄楯でかこまれ、そこに立てられた旗はたなびき炎のごとし。三界の尊者から崇拜され、ひとはこの勝利者 (ブッダ) の仏塔の前に頭



をつけて礼拝する。その冠の宝石が光り輝き、ブッダの両足にふれる。

第 42-43 行 あなたがたにとってのこの世界が剣を持って戦い、弓矢を持って戦うことからすみやかに解放されんことを。そしてこの世界がバラモンの神々の住居と等しいものにならんことを。

第 43-45 寂滅を完成された世尊の舍利が仏塔に安置され、この地上世界が仏塔で充満し、神々の王（帝釈天）の住まう諸山の王のスメール（須弥山）が存在する限り、とこしえに仏塔が存続せんことを。（Melzer 英訳：275-6 からの意識）

以上は仏塔建立の意義とその仏塔の崇拝について、やや一般論的に説くものである。しかしつぎに続く祈願の文章は、施主とおもわれる人物が第一称で語りだす。

第 45-46 行 ああ私の故郷よ、幸いあれ。そこにはこの清らかな高貴なお方の身体（仏舍利）、認識の基盤が安置されている。どうか、いつまでも飢餓と疫病から解放され、不和なく、平和であらんことを。（Melzer 英訳：276-277 からの意識）

第 46-48 行 そこは私たちの生まれた土地であり、多くの仏塔で飾られ、秋の白雲の群れのように眺められ、ハスの育つ池は幾千という太陽の光をうけて水面が浄化される。このすばらしく聖なる大村 (āryagrāma) が高貴な存在者たちによってしばしば訪れられ、まるで天上世界のようにならんことを。（Bakker 英訳：11 からの意識）

メルツァーはこの 2 詩節をメハマ (Mehama) 王の祈願文と考えたが、バックカー博士はサーラダ (Sārada) 国王の娘（王女）で、ターラガン王の妻 となった Buddh… の祈願文であると考えた。「私の故郷」とは、その王女の生まれ故郷であるとバックカー博士は推論した。続きを読んでみよう。

第 49-51 その身体から真実の美酒がほとばしる人、かれは……に喜びを見出し、執着心を捨て、瞋恚の念を起こさず、罪深い暴力からはなれ、粗野で悪意を含んだことばを発する過ちを断つ。かれは……誠実な心を持ち、友好的なことばに専念し、その美德は完成した。その人よ、どうか今後もシャールディーサ (Śārdīysa) の村においてなに不自由なく、いつまでも住み続けられんことを。（Bakker 英訳：13 からの意識）

この詩節のメルツァーの解釈とバックカー博士の解釈は大きく違った。第 50 行の *trivargah* をメルツァーは「三種のカーストたち」と翻訳し、バックカー博士は *triguṇa* の意味に同じと考え、「感受作用の三構成要素、そのバランスを完成した人」として翻訳した。バックカー博士はこの詩節は寄進者の一人 (no.7) の聖僧（善智識、阿闍梨）ラトナーガマ (Ratnāgama) に向けられた王女の願望であり、今後も自分の故郷シャールディーサ (Śārdīysa) に長く滞在してほしいと、真情を吐露したものであろうとした。この文章中に王女の故郷がシャールディーサ (Śārdīysa) であることが明示されている。バックカー博士は

寄進者名簿で知られた王女の故郷の *Sārada* とこの *Śārdīysa* との類似は単なる偶然でなく、本来は同一の地名を意図したものであると考えた。では最後の一節を読もう。

第 52-54 布施の心の強い保持者たちよ、どうか家族、力、善行に尊敬の念をもって栄えたまえ。かれらの苦悩に終わりがきますように。尊敬に値する人びとよ、どうか功德の積みかさねに成就されますように。穀物の豊作をもたらしたまえ。ブッダの舍利がとこしえに崇拝されますように。有徳な布施主の王よ、心の平和と幸福を享受されますように。(Bakker 英訳: 13 からの意訳)

最後の「有徳な布施主の王」とはターラガーンの国王、つまり王妃がこの仏塔の建立を委嘱した王であり、また王妃の父サーラダ王 (*Sāradaśāhi*) はメハマ (*Mahāśāhi Mehama*) その人であるとバックカー博士は考える (Bakker 2018: 12)。

以上でスコイエン・コレクションの銅板碑文の内容の検討を終えた。出土地不明、その真偽すら危ぶまれた一枚の銅板碑文が、メルツァーによる苦心の最初の解説、それに対するコイン学者たちの反応、メルツァーの推定した出土地に対するヴェシエールの大胆な修正意見、それを踏まえたバックカー博士のより綿密な碑文の解釈などにより、ようやく私たちは安心して新出の銅板碑文を歴史資料として活用できるようになった。多くの研究者たちの尽力に感謝したい。バックカー博士によれば、サーラダの地名はその土地で信仰された土着女神が学問の女神サラスヴァティー (*Sarasvatī*) と同一視され、シャーラダー (*Śārādā*) 女神と呼ばれ、それが村の名前になったという。この女神が有名になると、この地の学問所で使用された文字の書体がカシュミール全体に広がり、後にシャーラダー文字 (*Śārādā script*) として知られるようにさえた (Salomon 1989: 41)。

ではサーラダ *Sārada*、あるいはシャルディーサ *Śārdīysa* は地図上のどこに見出せるか。バックカー博士は次のように言う。ソルト・レインジの北のターラガーン (*Tālagang*) からシャルディ (*Shardi, Śardi*) まで約 260km、途中でタキシラとムザファラバード (*Muzaffarabad*) を経由し、ニーラム (*Neelum*) 川がジェラム (*Jhelum*) 河に合流する地点から、ニーラム川 (=キサンガンガ *Kiṣangaṅgā*) に沿ってその溪谷をさかのぼる。標高は約 1900m に達し、キサンガンガ川とマドゥマティー (*Madhumatī*) 川の合流点でシャルディ (*Śardi*) 村に到着する。シャーラダー女神 (*Śārādādevī*) の寺院廃墟は合流地点から東南 350m 進んだマドゥマティー川の右岸に立つ。バックカー博士は地図と寺院廃墟の写真を論文 (2018) の Figs. 1, 2 に載せる。私は手持ちの 400 万分の 1 の地図 (Bartholomew 出版の *Indian Subcontinent*) と 50 万分の 1 の地図 (*Survey of Pakistan* 出版 1986、Gilgit 地区) によって *Shardi* を見つけることができた。それは現在、インドとパキスタンがカシュミールを分割管理するうちの、パキスタン側のカシュミール (*Azad Kashmir*) の南北に細長い地帯に存在した。

その時まで *Sārādā* (*Śardi, Shardi*) の地名を夢中で地図上に追いかけてきた私は不思議な

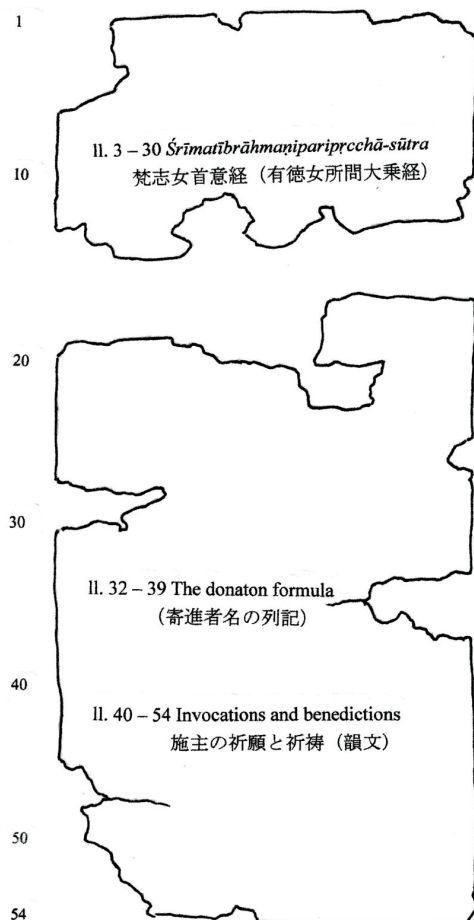
念に駆られた。シャルディ (Shardi) 村には確かにヒンドゥー教寺院遺跡が存在したが、仏教遺跡の存在が一向に語られない。しかし、その西に接近したパキスタン西北辺境州のハザーラ地区には、東京国立博物館調査隊が1995年から1999年にかけて発掘した仏教遺跡のザールデリー (Zar Dheri) が存在するではないか。そこで発掘された仏塔は実に壮大な規模であった。仏塔の基壇は一辺 24.8m、仏塔の直径は 18.6m、四方に階段をもつ十字形プランであり、階段を含めると仏塔基礎は全長で 45.6m となる。さらに塔院の北側には 50m x 80m (推定) ほどの四面僧房が附属する。その地区にはまだいくつかの仏教遺跡が存在するという。同調査隊の踏査では実際にいくつかの仏教遺跡を確認し、その分布図を示す (東京国立博物館 2011: 198-203, fig.3、調査遺跡一覧)。ザールデリーの仏塔の規模、建造年代 (4～5世紀) といい、スコイエン・コレクション銅板碑文が納入されてもおかしくない。しかし、さきほどサーラダ村とザールデリー仏塔の場所が接近すると表現したが、それはあくまでも地図上のことであり、実際は直線距離にして約 90 km ほど東西に離れ、しかも深い溪谷と高い山並みで隔てられている。ただ双方から流れ下る川はムザファラバードでジェラム (Jhelum) 河の本流に注いでいる。サーラダ国内にはいくつかのサーラダ女神の巡礼地があったと A. スタインは踏査記に示唆しているが (A. Stein 1900: II, 288)、サーラダ (Śardi) 村とザールデリー仏塔とを含む地域を一つのサーラダ国 (Śāradāsthāna) に含ませて考えるのはむずかしいだろうか。サーラダ女神廟のあるシャルディ村周辺で仏教遺跡が発見されれば申し分ないが、今のところ可能性は低い。銅板碑文に描写される仏塔で飾られたシャルディ村を彷彿とさせる情景として、ザールデリー仏塔とその周辺地の景観が参考となるのではないか。さらに銅板碑文に書かれた仏塔の建立の経緯とザールデリー仏塔の地理的環境は、ガンダーラ仏教が衰退していく中、それがどのようにカシュミールやギルギット、さらに西チベットへ浸透していくか考える上で貴重な資料になるのではないかと期待する。

今回のテーマは私自身の目下の研究テーマ「インドに侵入したフーナ族」から始まった (小谷 2019)。インドのビヒタリー (Bhitari) の石柱碑文にグプタ皇帝スカンダ・グプタ (ca. A.D. 456-67) が「フーナ (*Hūṇas*) 族と自ら交戦し、両腕でもって格闘した」とあり、それがインド史においてフーナ族のインド侵入を記録した碑文のうち、年代の判明する最初のものである。年代はスカンダ・グプタの即位前後のことである (ca. A.D. 456)。ただ戦闘がどこで行われたか、その時のフーナの王名も記録されていない。その次のフーナ族のインド侵入記録はリースタル (Risthal) 碑文で、「皇帝の称号を持って地上を支配したフーナ大王トラマーナ (Toramāṇa) をプラカーシャダルマン (Prakāśyadharman) が戦場で打ち砕き……」とある。この碑文は A.D. 515 年の日付をもつ。フーナ族トラマーナ王の名前はスコイエン・コレクションの銅板銘文に登場した。トラマーナのほかにヒーンギーラ (Khingīla)、メハマ (Mehama)、ジャヴウーカ (Javūkha) の支配者たちも登場した。みなフーナ王とみて誤りない。今のところスカンダ・グプタ皇帝と戦ったフーナ王が誰であったかの答えは保留のままである。しかし今回、私にとって西北辺境州とパンジャーブ州におけるフーナ族の動静をうかがい知ることができたのは大きな収穫であった。



参考文献

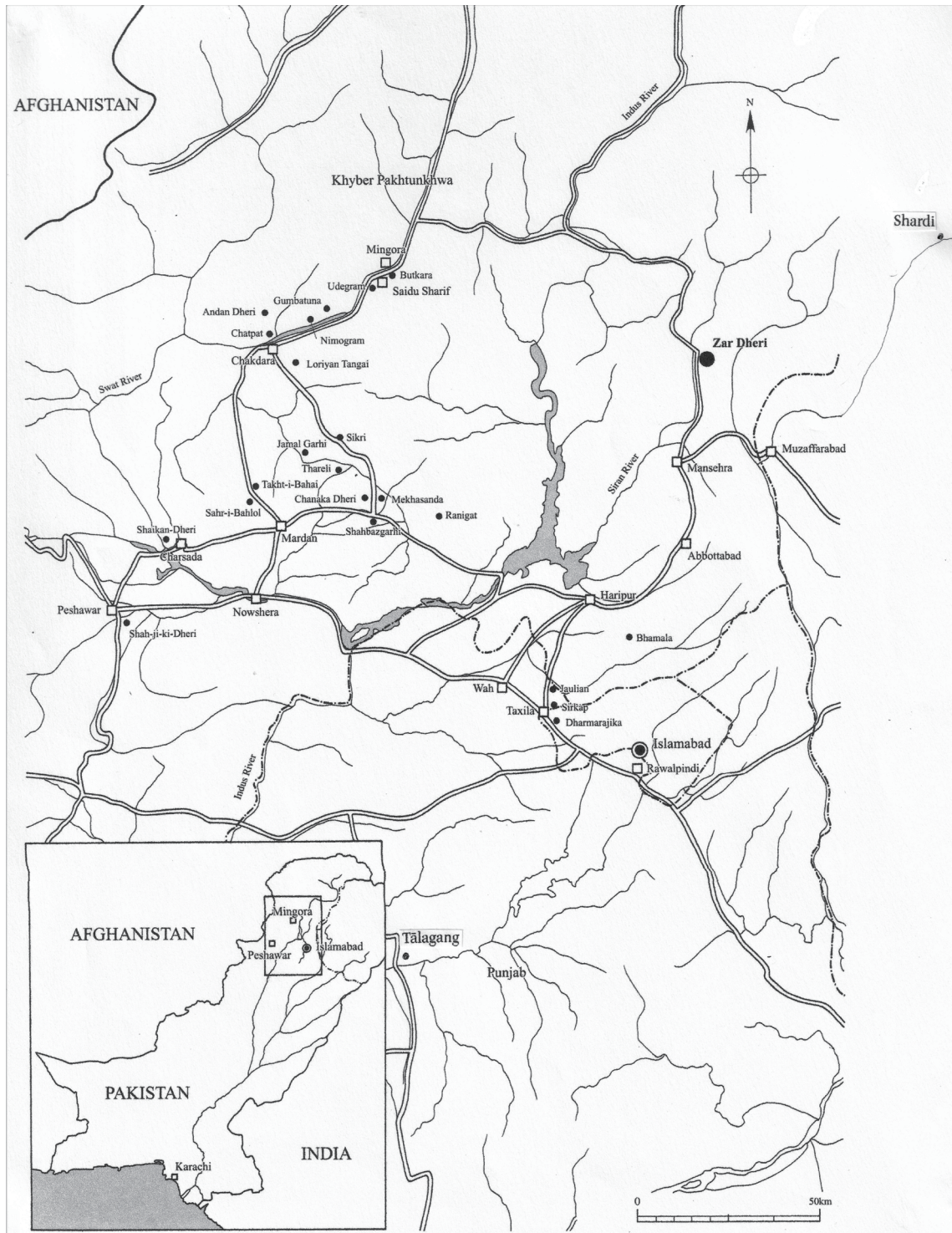
- Afram, M. and Pfisterer, M. (2010) Alkhan and Hephthalite coinage. In: *Coins, Art and Chronology II*, Wien: 13-38.
- Bakker, H. (2018) A Buddhist foundation in Śārdīysa: a new interpretation of the Schøyen copper scroll. *Indo-Iranian Journal* 61: 1-19.
- Errington, E. and Curtis, V. S. (2011) *From Persepolis to the Punjab*. The British Museum. paper ed.: 153.
- La Vaissière, E. (2012) A note on the Schøyen copper scroll: Bactrian or Indian? *BAI* 21: 127-130.
- Melzer, G. (2006) A copper scroll inscription from the time of the Alchon Huns (in collaboration with Lore Sander). in: J. Braavig ed. *Buddhist Manuscripts in the Schøyen Collection*. vol. III, Oslo 2006: 251-278.
- Pfisterer, M. (2013) *Hunnen in Indien: Die Münzen der Kidariten und Alchan*. Wien. (3.5.1.).
- Salomon, R. (1998) *Indian Epigraphy*. Oxford University Press.
- Stein, M. A. (1900) *Kaḥaṇa's Rājatarāṅgiṇī: A chronicle of the kings of Kaśmīr*. 2vols. repr. 1961.
- Vondrovec, K. (2008) Numismatic evidence of the Alchon Huns reconsidered. *Beiträge zur Ur- und Frühgeschichte Mitteleuropas* 50: 25-56.
- Vondrovec, K. (2014) *Coinage of the Iranian Huns and their successors from Bactria to Gandhara*. 2 vols. Wien.
- 小谷仲男 (2013) 「ガンダーラ美術の研究方法論—最近の出版物を通して—」 宮治昭編『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究』(科研費報告書 Vol.1、2013 年 3 月): 151-161.
- 小谷仲男 (2019) 「インドのフーナ族と中国史料の大月氏」『東方』462-3 号 (2019 年 8-9 月) 東方書店.
- 東京国立博物館パキスタン調査隊 (2011) 『ザールデリー—パキスタン古代仏教遺跡の発掘調査—』.



(挿図 1)

The outline of a copper scroll inscription of the Schøyen Collection, 58cm x 26cm, drawn by N. Odani, from Melzer (2006): Plates XXXIII – XXXIV.

スコイエン・コレクション銅板碑文の輪郭図:  
行数 (lines) と内容項目



(挿図 2) ザールデリー Zar Dheri、シャルディ Shardi、ターラガン Tālagang 遺跡地図

出典：東京国立博物館パキスタン調査隊『ザールデリー —パキスタン古代仏教遺跡の発掘調査—』2011:  
図 1 ザールデリー遺跡位置図、fig.1 Zar Dheri site location (Shardi, Tālagang の 2 地名を追加—小谷)